

面方院病、筋尻川東以線路六拾第

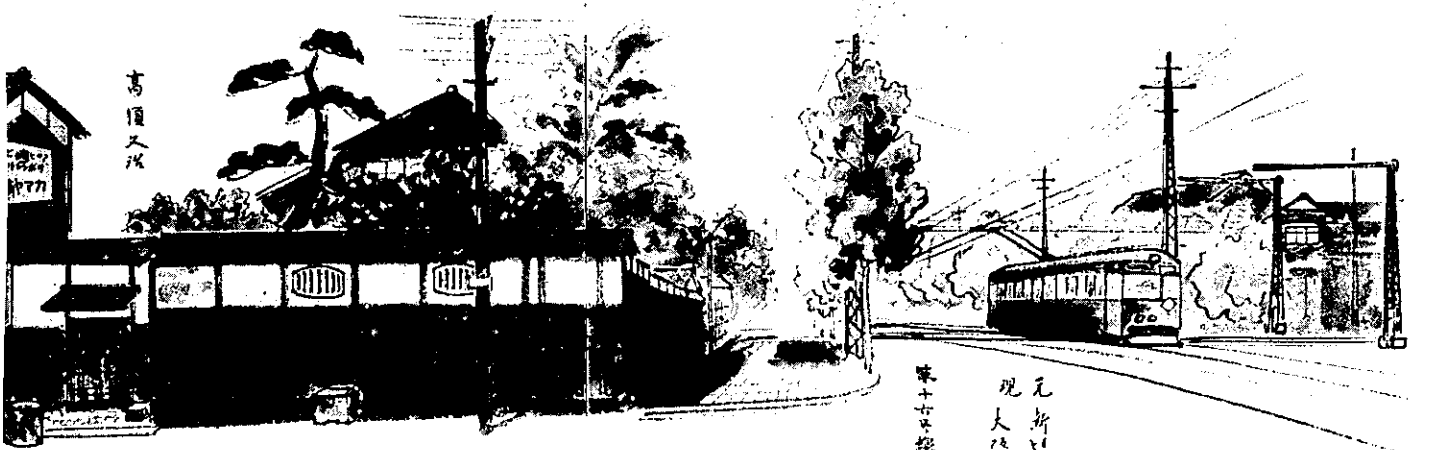
録記區地開疎次一第市堺

月十年九十和昭

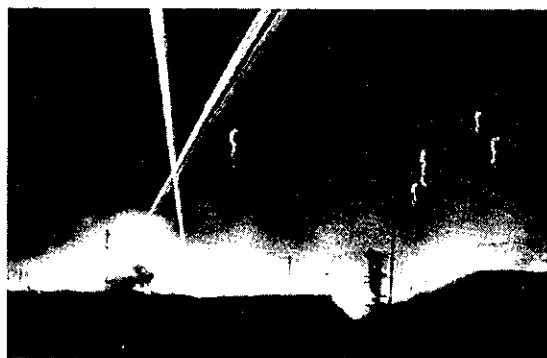
18年2月ガダルカナル撤退を転機として、敗勢はもはや動かしがなくなり、本土空襲は必至の情勢になった。ベルリン空襲の実情などからもはや防空訓練や防火用貯水池、防空壕などの構築では、とうてい役に立たないことがわかり、防空対策は防火から主要都市の建物・人口の疎開に切りかえられた。19年6月の大阪府会で堺も疎開都市に指定され、同10月の第1次をはじめ、5次にわたって、計3,620戸の撤去と11,846人の立退きをよぎなくされた。

建物疎開によって変貌する市内の風景を文章と画にして記録にとどめようと市は、堺芸術報国連盟に委嘱した。この画は、『堺市第一次疎開地区記録(19年10月)』として岸谷勢蔵氏によって、第16号線(現府道堺阪南線)以東川尻筋及び宿院方面を通りに沿った撤去直前の姿がみごとにえがかれている。(堺市立中央図書館蔵 写真は一部掲載)

岸谷勢蔵画



元新保電車
現大正電
第十七号線開道



写 151 第四次空襲 (渡辺車治撮影)

計ったが、なかには四方を火に包まれて、逃げ場を失ない、土居川・内川や貯水池などに浸って九死に一生を得たもの、避難の途中に、直撃弾で倒れるもの、全身黄燐の飛沫を浴びて生不動となって悲惨な最期を遂げるものも少なくなかった。

親は子を求め子は親を呼び、兄弟・妻子たがいに肉身を採りあつて、悲叫号泣、まことに阿鼻叫喚の焦熱地獄、なかでも竜神駅付近において逃げ道を失ない、数百の市民が一同となって無残の焼死を遂げたことは、酸鼻、面をおおう世紀の悲惨事であった。しかしこうした凄惨の修羅場裡に、猛火と闘って皮髪焼けたたれながら、なおよく防火につくした勇敢な市民も少なくはなかった。

呪うべき空襲は東天ようやく、白みかかる頃やんだ。しかも暗闇のなかに、おぼろげにうかび上ったのは一万七千余戸を焼き、一、八〇〇余の生霊を犠牲にした荒涼二万六千余坪の焦土の都市の姿であった。余燄はなおくすぶりつづけ、翌一日夜に至っても、暗夜に青い鬼火はあちこちに点滅していた。

被災者の体験談 和歌山の空襲のあとで、堺も空襲だと聞いたかと思うと、上町では、大橋さんの新宅へ、しょっぱなの焼夷弾が落ちたそうです。方々が燃えてきて、町内がざわめきわたったので、これは危いと思って、当時堺商三年生だった伴と外に出ました。それから引返して、おとうさん(亡夫のことをこう呼んでいた)に貴重品の風呂敷包みを渡してから、さて、どちらへ逃げようかと思案しました。かねがね、仁徳御陵方面へ逃げるように教えられていましたが、翁橋や安井町の辺に火の手が見えるので、そこは走り抜けにくいと思ひ、疎開跡の宿院通りを雑沓にもまれながら、電車の交叉点まで出ました。病院の東側に壊れ残りの土蔵が建っていました、そのあたりに四〇五〇〇人の避難者が群れていました。そうこうするうちに温々古さんの自動車の車庫や、その隣の大きい酒屋さんが、凄いで火を吹き

はじめました。これは危いから、大浜まで逃げようと思案していると、大浜方面から駆けつけた人は、大浜では平野ゴム(今の東洋ゴム)の煙が真黒に這い降りて来て、そこから真赤な竜巻がメラメラと舞い上って、沢山の人はバタバタと倒れていると声高に語るの、大浜へにげるのをあきらめました。ここで死ぬのとも知れないと思って、夏の掛蒲団を貯水池に浸してから、それで火の粉を防ぎながら、地上に這いつくばって行きました。蒲団が火の粉で燃えるから気がつけろという声で、蒲団の透間から外を覗くと、丁度紅の薄紙を透して眺めるように、あたりは真赤で、その中を火の粉が光りながら落ちていました。警防団員らしい男の人は、棒を振り廻しながら、多くの人々の燃え移った蒲団をたき消してやっていると眼に映りました。熱気で身体が熱いので、このまま死ぬのとも知れないと観念しましたが、それにしても、死なばもろとも思っていたおとうさんが、いったい何処へ避難したのだからと、それを案じていました。

火勢が衰えた頃には、夜が明けていました。すぐ、上町町の自宅の焼跡まで行って、おとうさんと会うのを待ちました。ついに姿を見せませんでした。そこへ、二条通に嫁ついている娘がやってきて、昨夜ずぶぬれの蒲団を被って火の粉を防ぎながら、ここまで駆けつけたが、誰の姿も見かけなかったの、みんな無事に避難したことと安心して、ひつ返したのだそうでした。それにしても、おとうさんは何処に避難したのだろうか? 鳳の上村は生れ故郷ですから、その親類へでも行っているのかも知れないと思つて、伴と二人で上村へまいりました。ところが、おとうさんは来ていません。急に胸騒ぎがしてきたので伴を自転車で焼跡まで走らせました。すると、お隣りの杉本さんや、警防団の丹羽さんが、伴の姿を見ると、「おとうさんはまことにお気の毒なことだ」といって、焼跡の防空壕のところへ連れていってくれたそうです。おとうさんは防空壕の中で、鉄カブトをつけたまま、俯伏せに死んでいました。死骸は火傷もなく奇麗な姿でした。何故、こんなことになったか、組長だったので消火につとめて逃げ遅れたのか、そのところは見当が付きませんでした。私は、何故おとうさんと一緒に死ねなかつたかと、涙がこぼれてとまりませんでした。

(大町東三丁第三隣組長竹内でん談 田島清筆録)

何分私の家は屋敷が広い上に、家族は当時僅か四人、しかも肝心の息子達は二人とも応召して不在で、後は私と嫁と七才に五才の孫だけであるので、おびただしい家財の疎開などは及びもつかないことだった。以前のように商売をして

いるのなら、出入りの者もあるが、それもないうこととて、頼みにする男手がなくてはならない。しかし空襲が烈くなるので、万一のことがあつてはと、六月の初めに家財の一部を藤井寺の岡田家へ預かってもらうように交渉をした。すると岡田のほうでも、折から農事の忙しい折なので、しばらく待つてくれとのことであった。その後岡田から七月の一〇日に荷物受取の人をさしむけるとの電話がかかってきたが、私は九日から暫く広瀬の親戚へむけて出かけるつもりで、とりあえず軸物一三幅と茶道具、それに夏の夜具に衣類を少しばかりと日用の身の廻り品若干、これはすべて嫁任せで、とにかく長持に二杯を運び出したところへ、岡田からの電話であつたので、少々疲れているから日を延ばしてはといったところ、岡田は「こちらはおまわらないが、後になってあの時来てもらっていたらということになるかも知れませんよ」と念を押されるので、「それもそうだ」とにかく明日来てもらいましょうと返事をし、それから疲れた身体で、明日の荷ごしらえにとりかかった。先祖の物や、本願寺からの拝領物、ついで軸もの等、